

砂 漠 化 す る 子 ど も の 心

— 農業の衰退と青少年犯罪の増加との関わりを考える —

富山県厚生連 大浦 栄次

現在、「いじめ」や神戸の事件、連続通り魔事件、ナイフによる殺人など、青少年による命を軽視する犯罪が頻発している。その対策として、例えば「いじめ対策委員会」やカウンセラーの設置、取り締まりの強化、あるいは、命の大切さを教える教育の展開などが叫ばれている。が、これが根本的な対策と言えるのであろうか。

思うに、命の大切さの教育とは、命の豊かな営みに直接触れることこそが、最も重要なことでなかろうか。

ところで、「命の大切さを知るために、命と触れ合うことは必要だ」、と叫ぶ識者は、少なからずいる。曰く、「過去と比べ、現代は自然との触れあいが極めて少なくなった。そのことが、命を軽視する風潮を産んでいる」と。では過去に比べ現代は、一体どの程度「命」との触れあいが少なくなっているのか。残念ながら、このことを数値で示した報告は、ほとんどない。

そこで、過去と現在の「命との関わり」について、平成8年から9年にかけて各種の講演などの機会に参会者の方々に協力いただき、アンケート調査を行った。回答総数1,158人のうち、今回は約940人の女性について集計した。その結果の概要を述べ、「生き物との関係」がいかに重要かについて考えてみたい。

激減した生き物との関わり

生き物の世話の体験の減少

「子供時代、記憶にのこる生き物の世話をしたことがありますか」について、子供時代、農家であった者では86.3%、非農家74.8%が何らかの生き物の世話を経験していた。年代別でも、ほとんどその率に差はない。一方、「現在、生き物の世話をしていますか」では、現在、農家の者70.4%、非農家のもの58.9%と、子供時代に比較して少なくなっている。特に、39歳以下で、農家、非農家を問わず、現在生き物の世話をしている者は、他の年代に較べ少なく6割以下である。(表1、2)

このように、各年代とも子供時代に比べ、現在、生き物の世話をしている者が明らかに少なくなっている。

ところで、今回の調査では20歳代の回答者は20人と少なく、また10歳代は未調査であるが、若い世代で生き物の世話を現在している者の割合は更に少ないと考えられる。富山大学の教養課程の女子学生90人を対象にした調査では、現在、生き物を世話をしている者は、農家50.0%、非農家33.3%と極めて少なかった。

この調査を現在問題になっている中高生や小学生を対象に行ったら、どのようになるであろうか。大人ですら、生き物の世話を

者が少なくなっている現状から考えると、子供達はほとんど無くなっているのではなからうか。

さらに、今回の調査では、子供時代の生き物の世話については、「記憶にのこる生き物の世話」との条件をつけた。もし「のこる」の条件をなくすると、高齢者の子供時代はほぼ100%何らかの生き物との関わりをもっていたとの結果になったであろう。特に、過去の農家では農作業の手伝いは当たり前であり、また、虫取りや川での魚取りなど、記憶は薄れているかもしれないが、全て経験してきたことである。

このように、過去より現在において生き物との関わりは確実に少なくなっている。また、自然がまだ残っており、かつ農産物を生産し生き物の世話をする機会が多いと考えられる農村でも、確実に生き物との関わりが少なく

なっている。

これを、どのような生き物と実際関わっているかを検討すると、事態はさらに深刻である。

激減した、家畜類との関わり

世話をしている生き物について具体的例をあげて尋ねた。

「牛、馬、山羊、羊、ウサギ、豚、鶏」などの家畜・家禽類、「猫、犬、小鳥、魚、アヒル、昆虫、亀、ハムスター」などのペット類、「花、木、野菜」などの植物から、世話の経験のあるものに○印をしてもらい、さらに項目にないものは具体的に書いてもらった。

これらを、家畜・家禽類（以下、家畜類と略す）、ペット類、植物に分類し、世話をした者の比率を求めた。（表3、4、図1、2、3）

表1 子供時代、記憶に残る生き物の世話をしたことがある

年歳	回答数			有り			「有り」の場合		
	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計
～39	81	49	130	68	39	107	84.0	79.6	82.3
40～	194	85	279	169	63	232	87.1	74.1	83.2
50～	226	61	287	194	47	241	85.8	77.0	84.0
60～	152	63	215	134	48	182	88.2	76.2	84.7
70～	12	16	28	9	8	17	75.0	50.0	60.7
合計	665	274	939	574	205	779	86.3	74.8	83.0

表2 現在、生き物の世話をしている

年歳	回答数			有り			「有り」の場合		
	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計
～39	81	48	129	46	27	73	56.8	56.3	56.6
40～	182	93	275	129	62	191	70.9	66.7	69.5
50～	199	84	283	139	54	193	69.8	64.3	68.2
60～	136	75	211	108	40	148	79.4	53.3	70.1
70～	7	21	28	4	6	10	57.1	28.6	35.7
合計	605	321	926	426	189	615	70.4	58.9	66.4

過去、農家では家畜類の世話の体験のある者が54.4%、非農家27.7%が、現在では、農家5.0%、非農家0.9%と壊滅的なまでに激減している。

年代別では、農家、非農家とも「世話あり」は50歳代が最も多く、それぞれ、65.5%、41.0%であるが、40歳代、39歳以下と年代が若くなるに従い世話をした者の比率が低下している。特に、39歳以下では農家21.0%、非農家12.2%と激減している。なお、高齢者でも子供時代世話をした者の比率がピークの50歳代より少なくなっているが、これは「記憶にのこる生き物の世話」と条件をつけたためであり、記憶の剥落によるものと考えられる。もう少し若い年代時に調査をすると現在の50歳代と同程度か、70~80%以上の比率になると思われる。

このように、家畜類の世話を経験した者は、

現在の40歳代ぐらいから若い年代にかけて少なくなり、現在ではほとんど皆無となっている。この40歳代の子供時代とは、今から約30年~40年前、つまり、昭和30年~40年にかけてである。この時代は所得倍増政策が打ち出され、さらに次の列島改造時代の物・金中心時代への突入前夜である。

ところで、具体的な家畜では、例えば、牛または馬の世話の経験、さらには、山羊や鶏の世話の経験のある者は、若い時代ほど世話をした者が劇的に少なくなっている。(図4, 5, 6)

このように、日本の数千年の歴史の中で、人間は営々と生き物の世話、とりわけ家畜類などの世話をし、ほとんどの者が何らかの形で関わってきた。それが、わずか30~40年の間に一気に関係を断ってしまったのである。

表3 種類別、生き物の世話をしたことのある者の割合(子供時代)

年歳	家畜			ペット			植物		
	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計
~39	21.0	12.2	17.7	74.1	77.6	75.4	29.6	30.6	30.0
40~	50.0	22.4	41.6	62.9	62.4	62.7	32.0	35.3	33.0
50~	65.5	41.0	60.3	50.9	54.1	51.6	38.1	36.1	37.6
60~	61.8	36.5	54.4	47.4	44.4	46.5	46.7	39.7	44.7
70~	50.0	18.8	32.1	50.0	31.3	39.3	50.0	31.3	39.3
合計	54.4	27.7	46.6	56.4	57.3	56.7	37.4	35.4	36.8

表4 種類別、生き物の世話をしたことのある者の割合(現在)

年歳	家畜			ペット			植物		
	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計	農家	非農家	合計
~39	6.2	0.0	3.9	49.4	41.7	46.5	29.6	37.5	32.6
40~	4.9	2.0	4.0	53.8	50.5	52.7	45.1	41.9	44.0
50~	3.0	0.0	2.1	47.2	48.8	47.7	47.2	40.5	45.2
60~	6.6	1.3	4.7	44.9	18.7	35.5	62.5	42.7	55.5
70~	14.3	0.0	3.6	28.6	14.3	17.9	42.9	23.8	28.6
合計	5.0	0.9	3.6	48.8	38.9	45.4	47.6	39.9	44.9

かろうじて維持されているペット類、植物との関わり

ペット類では、過去の農家では世話の記憶のある者が56.4%、非農家57.3%、現在の農家48.8%、非農家38.9%であり、世話の体験ある者が少なくなっている。世代別では、過去においては若い世代の方が世話の経験を持つ者が多く、農家、非農家の差はほとんどない。

種類別では、犬などは農家、非農家、また過去、現在の区別なくほとんど変化なく、約25%の者が体験している。しかし、猫、小鳥、昆虫などを世話する者は、過去に比べ、現在は世話する者が、かなり少なくなっている。(図7, 8, 9)

ところで、ペット類でも猫などは、過去においては愛玩動物というより、ネズミを取る一家の大事な働き手であった。「この猫はネズミを取るのが上手で、役に立つ」などと評したものである。昆虫類などは、庭先からヒョイととってきて、囲い、弱ると庭に放してきた。このようにペット類に分類したもので、買ってきて愛玩するというより、一家の働き手であったり、自然の一部を家に持ち込む程度であった。しかし、現在のペット類は、明らかに愛玩であり、現在の子供達にとってカブトムシの生息地はデパートであり、死ねばまた買ってくればいい。そして、愛玩されなくなると、捨てるなどということが平然と行われる。

植物類では、過去においては農家、非農家でほとんど差がなく、農家37.4%、非農家35.4%の者が世話を体験している。さらに、現在では、農家47.6%、非農家39.9%と増加している。特に農家の50歳代、60歳代での増加が著しい。

これは、農協女性部などが安心・安全・新鮮な自給野菜などを大切に作る運動の大きな成果とも言える。また、花などを鑑賞する余裕ができたためとも考えられる。

多様な生き物との関わりから、淡泊な関わりへ

ところで、生き物の世話をした者は、平均、何種類の生き物の世話をしたであろうか。例えば、「鶏、猫、花を世話をしておれば、三種類」とした。(図10)

ここでも、子供時代、農家のもので70歳代では五種類もあったものが、30歳代ではその半分減っている。特に、家畜類では70歳代で2.2種類であったものが30歳代ではわずか0.4種類に激減し、さらに現在は農家、非農家を問わず、どの年代もほとんど世話の体験がない。(図11)

ところで、人によっては、親猫が子供を産み、さらに親は死んでもその子を、さらに孫猫を、世話をした体験もあるだろう。しかし、今回の調査では全て猫は、猫一種類とだけカウントしている。もし、親、子、孫猫のそれぞれを一種類とカウントすれば、過去と現在の差は、さらに大きくなるであろう。

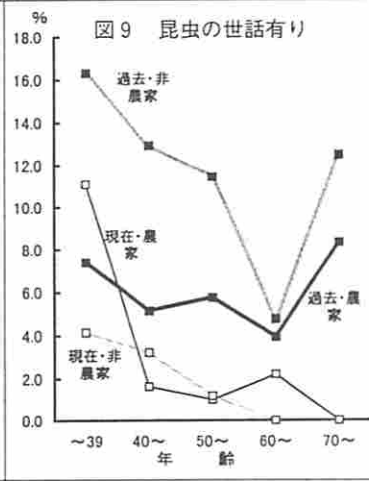
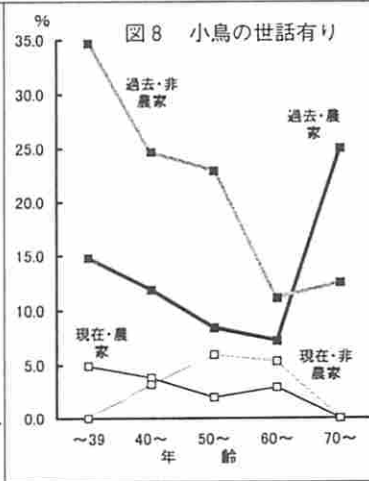
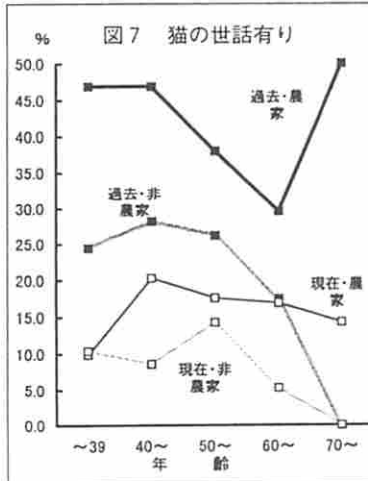
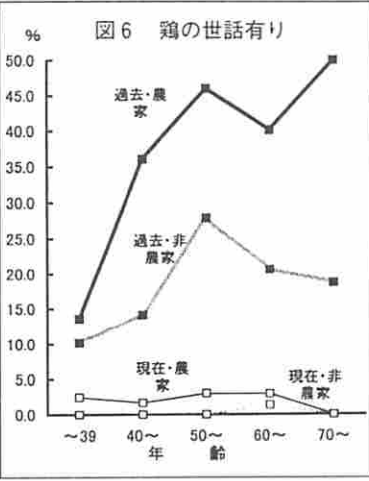
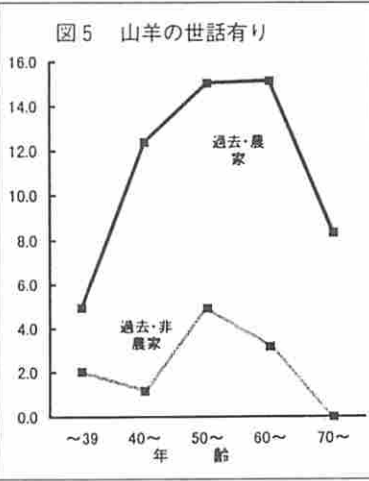
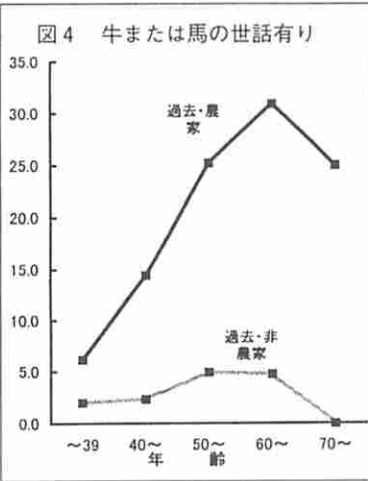
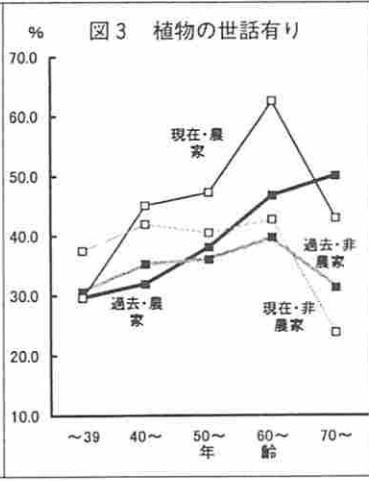
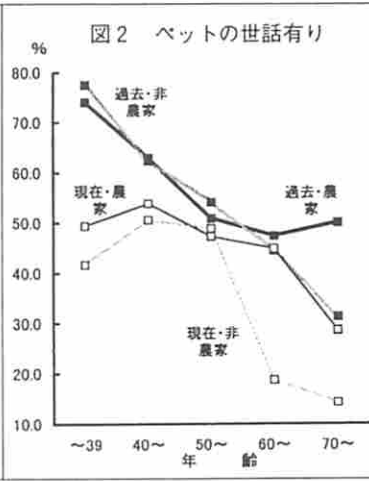
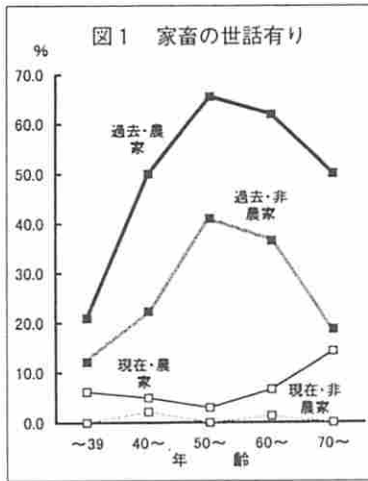
このように、現在は、単に生き物との関わりが少なくなっただけでなく、関わった生き物の種類も、ごく限られている。

生き物の世話の体験が、人生観に与える影響

子供時代、記憶に残る生き物を世話した者に「生き物を世話したことが、人生に影響がありますか」では、「いい影響を与えた」と答えた者が77.9%「悪い影響」と答えた者はわずか1%であり、他は「特にない」、「分からない」であり、圧倒的多数の者が、子供時代生き物の世話をしたことが、人生観にいい影響を与えたと肯定的にとらえている。

さらに子供時代、「世話をしていた生き物が死んで悲しい思いをしたことがあるか」では、世話をした9割の者が「悲しい思い」を体験している。(表5, 6)

これら、人生に対する影響や、悲しい思いについては年代的差はほとんどない。



さらに現在、「身近に生命が育ったり、生まれたことに感動したことがありますか」に対して、子供時代並びに現在とも、生き物の世話を体験している者は、「感動がよくある」が42.6%、「ときどきある」が49.2%であり、両者を合わせると92%に達する。逆に、感動を「余り感じない」はわずか8.0%である。

一方、子供時代・現在とも生き物の世話の体験のない者は、「感動がよくある」がわずか10.1%に対して、「余りない」が52.2%と半数以上を占めている。また、子供時代または現在のいずれかの時にのみに生き物の世話を体験した者は、身近な生き物に対する感性は、全く経験しなかったものよりも、感動はあるものの、子供時代・現在とも生き物を世話をしている者ほどにはない。(図12)

なお、感動する内容は、「子供や孫が生まれて」、「自分の世話している生き物の育つ姿を見て」が共に6割前後を占めている。

このように、生き物の世話の体験は、人生にいい影響を与え、また、その生き物が死ぬ事により、自分以外の命に対して深い愛情と

悲しみを感じた経験を持っている。さらに、現在、様々な生命の営みに対して、子供時代そして現在とも生き物を世話をしている者の9割以上が、命の営みに感動を覚え、逆に子供時代・現在とも生き物と関わりのない者は、その半数以上が命の営みに感動を覚えないとしている。

今回の調査は、対象者のほとんどが30歳以上であり、しかも女性であった。もっと若い世代や男性はどうであろうか。

今、子供達に農業体験を

命の営みからはぐれた子供達

40年も前の子供時代、いろいろな生き物が身近にいた。山羊がいて、鶏がいた。牛もいた。餌をやり、色々な世話をした。特に山羊の世話は、我々兄弟の仕事であった。夏の炎天下の干し草づくり、乳搾り、敷きワラ交換等々。子供を産む場に何度も立ち会った。そして我が家の山羊は、器量よしであった。未

表5 生き物の世話をしたことが人生に与えた影響(%)

年歳	～39	40～	50～	60～	70～	計
特にない	11.7	7.2	16.4	16.0	26.7	13.1
良い影響を与えた	73.8	82.4	76.7	77.8	60.0	77.9
悪い影響を与えた	0.0	0.5	0.5	2.5	6.7	1.0
分からない	14.6	10.0	6.4	3.7	6.7	8.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表6 世話をしていた生き物が死んだ時(%)

年歳	～39	40～	50～	60～	70～	計
経験がない	3.9	3.6	8.3	8.4	6.3	6.2
悲しい思い出はなし	1.9	3.6	3.9	4.8	6.3	3.8
悲しい思い出が有る	94.2	91.9	87.4	86.8	81.3	89.4
その他	0.0	0.9	0.4	0.0	6.3	0.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

だにあの顔、様々な表情をしっかりとした輪郭で思い浮かべることが出来る。

もちろん、農作業としての米づくりや野菜づくりの手伝いは当然のことであった。

猫もネズミを取る生き物として、一家の大事な働き手であった。生まれた5匹の子猫を布団に入れ、毎日添い寝をした。ある日、外に走り出る時、そのうち一匹が一緒に走りついて来て、思わず踏みつけてしまった。口をつけて人工呼吸を1時間も2時間もしたが、ついに弱々しい息づかいを救うことができない

かった。今も、胸が痛む。

ドジョウ、フナ、シジミ、カラス貝、タニシなど子供達が取ったものが、一家の大切な食料の一部として度々食卓に上った。川を覗くと、メダカやミズスマシ、ヤゴなど一日中眺めていても飽きない世界があった。日本中、どこでも当たり前に見られる風景であった。

あれから、20~30年。土地の区画整備が進み、コンクリート用水が直線的に村々を走る。川からは様々な生き物の豊かなさんざめきは消え、死に絶え、危険な場所となった。燃料

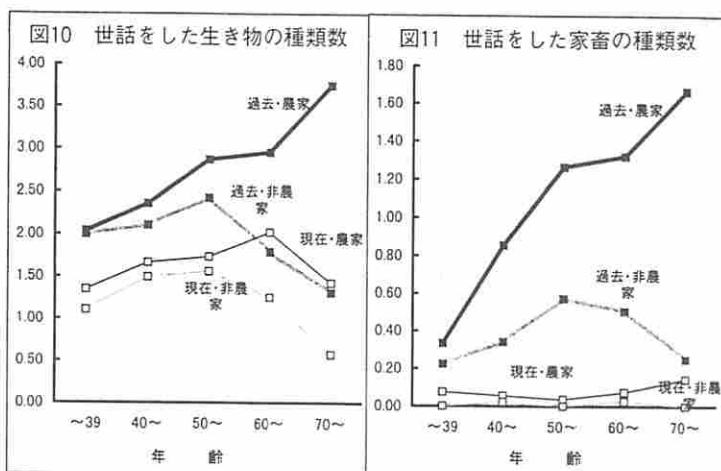
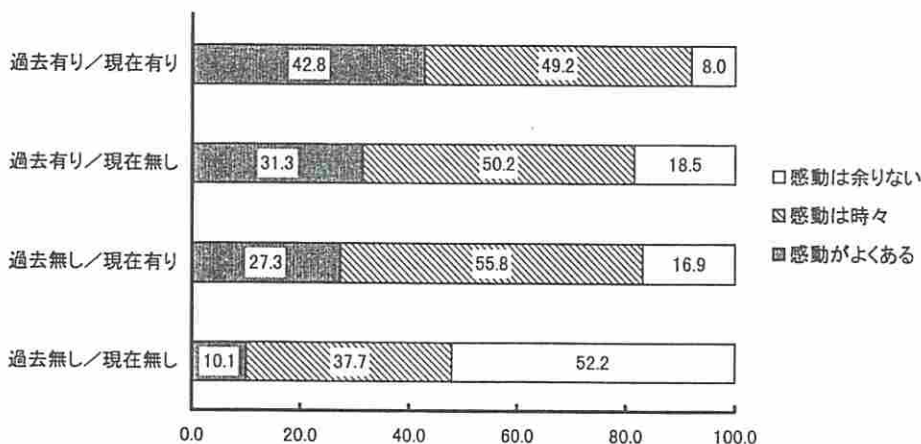


図12 生き物の世話の有無と命の営みに対する感動の仕方



例：過去有り/現在有り・過去も現在も生き物の世話をした経験がある

としての薪炭を提供していた屋敷林は、石油にその位置を譲り、次々にきられていった。そこを寝ぐらとしていたセミや小鳥などの生き物は、いつのまにかいなくなった。

卵も牛乳もお金さえ出せばいつでも安く手にはいるようになり、苦労して家で飼う必要もなくなった。

が、その結果……………。

子供達を幾重にも取り巻いていた生き物が、一つ、また一つ消え、そして、ここわずか20～30年の間に、ほとんど全ての生き物が消えてしまった。今、最後に子供達だけが砂漠にポツンと取り残されている。生き物との関わりの記憶すら、この子供達にはない。

農業が人格形成に果たす役割

今回の調査結果は、生き物の世話の体験の有る者が他人の痛みを自分の痛みとしてとらえ、日々の命の営みに感動を覚えることを数値で明らかにした。逆に、生き物の世話の体験のない者は、他人の痛みに悲しみを覚え、命の営みに感動も覚えなことを意味する。

現代の子供達は生き物の世話の体験がほとんどない。このことが、頻発する青少年犯罪の根本的原因であると言っても過言ではないであろう。であるなら、現在の子供達にとって最も大切なのは、生き物の世話の体験を持たせることである。そして、農業はまさに生命産業であり、生命教育の豊かな場を提供する。

自分達で育てたサツマイモ畑の芋掘り。家では決して芋を食べない子供が、美味しいと言って思いっきり食べる。これこそ、命の営みに感動を覚える教育であり、それが農業である。心の荒廃を克服するため全国津々浦々で、地域と結びついた学校農園や三世代交流農園などが展開されることを望まざるにはられない。

だが、一方で農業は残酷でもある。育てた生き物を食べてしまう。鶏が卵を産まなくな

り廃鶏となると、首を切り解体して食べてしまう。しかし、まだ卵を産んでいる鶏や食料としない場合は鶏の命を奪うことは決してない。そして、あなたの命を私の命にいただきせて「いただきます」と感謝する。

ペットでは、ここまで踏み込むことはないし、猫を天ブラにして食べることはない。ペットを学校で育て、命の教育に役立てようとしている努力に異議を唱えるものではない。が、ここがペット教育の限界である。

いのちの「故郷」をとりもどそう

農業は、単に安心・安全な食料を安定的に供給し国土保全をするだけではない。数値では測り得ない、豊かな心の形成に無限の貢献をする。

実家の兄は、昭和60年からアイガモによる水田除草を始めた。これまでもアイガモを使った除草はやられていたが、いずれも十分普及する技術ではなかった。兄は様々な工夫をし、誰でもができる技術とした。それが、NHKや日本テレビの「ズームイン朝」など様々なメディアにのり、今や全国に広がっている。

そして今は年中、家にはアイガモがいる。

兄には、小学校二年を頭に三人の子供がいる。アイガモが弱ると子供達が家に連れてきて、一生懸命看病する。保育園児の二番目の男の子のスケッチブックは、アイガモ達で一杯である。主人公のアイガモ達がおにぎりを作ったり、畑をしたり、田圃をしたり、水浴びしたり。

秋には、毎朝アイガモ達を300mほど離れた大きな川に連れていく。日がな水浴びをして遊ばせ、夕方に呼び寄せ家に戻る。三日もすると、朝、小屋の戸を開けてやると、アイガモ達は案内せずとも自分達だけで川へ行く。夕日が沈む頃、また自分達だけで、夕焼け小焼けの歌をガアゴォ、ガアゴォと唱いながら野道を手をつないで戻ってくる。いのちが降るようにある里、いのちの「故郷」がここに

ある。

今、輸入食品が溢れ、農業は瀕死の状態である。さらに一部生協では、無農薬、有機栽培の農産物を少しでも安く手に入れるため、海外生産を手がけ輸入し始めた。しかし、安心・安全の食べ物は輸入することができても、「いのちは大切だよ」との心まで決して輸入することはできない。豊かな命との関わりの中で初めて、「いのちは大切だよ」との心を育む。

人間も自然界の一員

朝起きると、小鳥が鳴いている。朝の小鳥が鳴き出す時間を一年にわたって調べてみた(図13)。実に正確である。太陽がのぼる時

間に合わせて小鳥達が起き出す。みごとに自然の摂理に従って生きている。

今年の冬、東京に出張した夜明け前。空はまだ真っ暗な6時過ぎ、小鳥がすでに鳴いている。ネオン街で夜遊びに興じていた鳥達だろうか、はたまた、夜明け前のネオンに起こされたのだろうか。人間は、遊びだ夜勤だと自然の摂理に逆らって生きている。

人間はあくまでも自然界の一員である。他の生き物と共に生きてこそ、人間性を発揮する。農業は生命教育の原点である。自然の摂理に逆らい、農業を衰退させ、他の生き物と一緒に住むことを断った非人間生活からは、非人間的な人間、非人間的な子供しか生まれないのではなからうか。

図13 我が家の朝の小鳥が鳴き出す時間の年変化

